

かたりべ

豊島区立郷土資料館だより



トキワ荘の夜景

「いらっしやいまし

私の名は……トキワ……

ええ……生まれは

昭和二十九年ですの……

私は東京の北の

椎名町という街角でした」

手塚治虫の「トキワ荘物語」（コム一九七〇年九月号）冒頭の一節である。

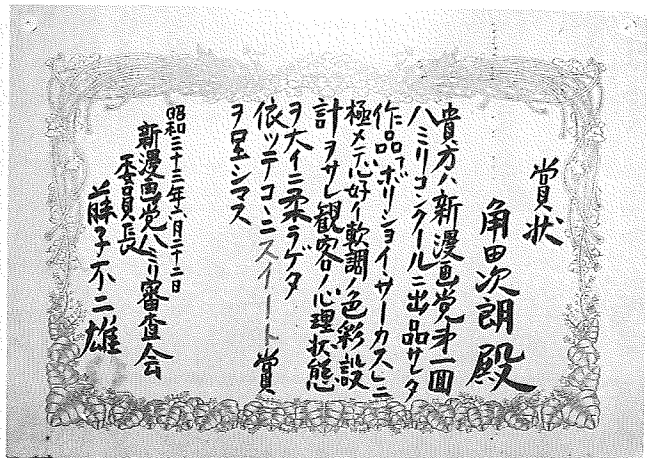
現在の南長崎三丁目にあったトキワ荘は、手塚治虫・寺田ヒロオ・藤子不二雄・石ノ森章太郎・赤塚不二夫など〳〵の第一線で活動し、活躍を続けている漫画家たちが、その青春のある時期をすごしたアパートとして知られている。

上の写真は、一九五六年当時のトキワ荘の夜景で、藤子不二雄の一人である安孫子素雄氏が撮影したものである。この二階が、幾多のエピソードを生んだ彼らの生活の舞台であった。

一九八六年秋・特別展・十一月十八日〜十二月二十六日・
トキワ荘のヒーローたち——漫画にかけた青春——

今回の特別展は、旧椎名町五丁目にあったトキワ荘に居住した手塚治虫をはじめとする漫画家集団の青春時代をとり上げました。

日本近代漫画の発達は北沢楽天や岡本一平に求められますが、明治から大正にかけての特徴は世相風刺にあります。これは発表媒体が主に



新漫画党ハミリ審査会賞状

「新聞」だったことに規定されていると言えます。その後読者も子供を対象としたものに拡大し、雑誌『少年倶楽部』を中心に少年漫画が盛んになりました。その代表は田河水泡の「のらくろ」と島田啓三の「冒険タン吉」です。戦後

漫画はその影響を受け、新聞四コマ漫画を一つの流れとしつつ特に月刊少年誌が隆盛し、これと資本の単行本に多くの新人が活躍しました。戦後漫画をリードしたのが手塚治虫であることは言うまでもありませんが、トキワ荘グループはその影響を強く受けた、主に『漫画少年』などの月刊誌を舞台に活躍した戦後第一次新人漫画家集団でした。彼等は新漫画党を結成し、党首の寺田ヒロオの他、藤子不二雄・石ノ森章太郎・赤塚不二夫・つのだじろう・鈴木伸一などがいました。そのほとんどが地方から上京してきた若者で、新人のアパート暮らしは楽では

ありませんでした。安いキャベツばかり食べたり、風呂もろくに入れない生活でした。だが文化活動は旺盛で、活発、奇抜なものでした。映画鑑賞が最大の娯楽でしたが、彼等は単なる娯楽とせず、勉強の場として仕事に生かしていました。安孫子素雄は支出の一割が映画代でした。漫画という静止した二次元の世界にたざざわる彼等にとり、動く写真は魅力だったに違いありません。彼等はハミリで劇映画を作りました。安孫子・石ノ森はテレビを買い、石ノ森はステレオも持っていました。SFや文学を読みました。この文化・電気器具の早い購入は一見贅沢なようですが、決してそうではなく、創作活動の一環そのものだったのです。

遊びも茶目気のある凝ったもので、ハミリ映画や野球にも賞状を用意しました。新漫画党の会合は、腹のよじれるほど愉快なもので様々なエピソードを生みます。そのような楽しい共同生活があったからこそ、今でも彼等の友情は続き、再会すれば青春が蘇るのでしょう。



トキワ荘の棟柱

生活資料調査

長崎地区おわる

今年7月17日より8月3日まで、長崎地区の歴史・生活資料調査が行われました。そこで、今号では、調査の成果を皆さまに報告し、調査をきっかけに寄贈された物や逸話を紹介していきます。

ありがとうございました

調査員の公募を行ったところ、2倍近い方々から申しこみがあり、抽せんの結果、延べ24名のチームで調査を行いました。

7月、8月の炎天下、旧長崎町の地域をすみずみまで歩き、たくさんの方々のご協力のもとに、どこのお宅にどのような生活資料が残されているか聞き取り調査を行い、それにまつわるエピソードや、昔の地域の様子を記録することができました。

調査をきっかけに館へ寄贈された資料も、58件577点にのぼっています。

集まりました

写真は、南長崎6丁目にお住まいの兼子一恵さんから寄せられた婦人服上下です。

この服は、昭和18年ごろ、軍属として中国へ派遣されていたご主人のもとへ行かれる際、一恵さんがあいさつ用に買われたものだそうです。18年10月3日、南京へ渡りましたが、連絡船は初の爆撃沈船コンロン丸の20分前の便でした。

調査をきっかけに館へ寄せられた資料には、旧長崎村の農村としてのありさまがほうふつとするような農具のかずかず、震災のち郊外都市として発展する中で使われた都市生活用品など、多種にわたるものが含まれています。

写真の洋服のように、時勢を反映し忘れられない話にいろいろられた資料も少なくありません。



農村としての長崎村

大正の震災後に都市化が始まるまで、長崎村は、畑作中心の純農村の様相を呈していました。谷端川や千川上水に沿った湿地を除けば、米にはあまり向かず、大麦、小麦、大根、ホウレンソウ、ナス、トウモロコシなどが盛んに作られていました。ナスは、作物のほか苗を出荷する家もあり、「長崎ナス」の呼び名もありました。また、現在の高松あたりではミョウガが作られ、品質が良いので神田の市場でひっぱりだこであったそうです。

農村らしい行事も残されています。写真は、7月の盆に今でもこしらえる高松の安田一郎さんのお宅の精霊棚です。朝・昼に、小麦の粉で作った慢頭やうどんを供えるのが習慣でした。麦中心の畑作農家で、自家の収穫物を先祖に供えた、ほほえましい風習です。



高田・雑司が谷の生活資料展 第二回 戦中戦後の区民生活

好評のうちに……

来館者の声 — 入館票より —

高田・雑司が谷の生活資料展は、6月3日から22日まで開かれ、延べ933名の来館者を迎えました。この特別展は、地域に古くからお住まいの方々から館へ寄贈された生活用品を紹介し、昨年の歴史・生活資料調査の成果を披露しました。「昔使っていたものを見て、実用的な

みると切なくなる(19歳 女)。「どきっとするものがあつた(18歳 女)。「軍事郵便を書き綴った方とご家族の方々のことを察すると、心うたれた(24歳女・22歳男)。「辛い苦しい生活でしたが、非常になつかしい思いもしました(51歳 女)。」などの感想をきくことができました。

ところへ感心した(16歳 女)。「もの」の説明ではなく、その利用・来歴が記されている点、民俗誌的で効果的だと思う(27歳 男)。「人のぬくみのある品々に、生きている楽しさを味わえました(71歳 男)。」などの感想がありました。

戦時下の人々のくらし
第二回戦中・戦後の区民生活展は、7月2日から8月16日まで開かれ、延べ1493名の来館者を迎えました。

戦時下の区内で実際に使われた生活用品、学童疎開の写真や空襲をうけて変形した品物などを展示し、「戦死の通知や空襲にあつた品物を

「高田・雑司が谷の生活資料」

1986・6・3～22



声

昔の人の息づかいがきこえるよ。(22歳男)
当時の写真を多くして、人間の生活と道具との関係を表現してほしい。(33歳 男)

長崎獅子舞のビデオを見て、郷里(岩手)の獅子舞と比較して興味深かった。(71歳 男)
わたしが生まれていない時のいろいろなものがあり、おもしろかったです。(9歳 女)
豊島が植木にこれほど関係あると思いませんでした。(47歳 男)

小中学生のボランティアと資料収集をすれば、次代へ引きついでいくことができるかと思えます。(40歳 男)

後記

9月11日から地域史講座、24日から歴史講座後期が始まりました。文化の秋です。11月18日「トキワ荘のヒーローたち」のオープンです。職員一同、入館票にみる皆さまの声に励まされて、フル回転しています。

かたりべ

No. 7

1986年11月15日
発行

豊島区立郷土資料館
豊島区西池袋2-37-4

電話03-980-2351